

主 題：パウロの頌栄

聖書箇所：ローマ人への手紙 16章25－26節

ローマ人への手紙16章25節からみことばを学んでいきます。このローマ人への手紙も最後のところに差し掛かって来ました。パウロはこの手紙を主なる神への頌栄をもって終えます。そして、この頌栄を私たちは学んでいきますが、このみことばを学ぶときに私たちはキリスト者パウロの人物像をはっきりと見ることができます。パウロはどんな信仰者だったのか、彼はどのように日々の生活を歩んでいたのか、そのことを私たちは知ることが出来ます。ひと言で言うなら、パウロは自分の救いを心から感謝しながら歩んでいた信仰者だということです。救われたことを感謝しながら、救われたことを喜びながら、救ってくれた主を誉め称えながら彼は日々を歩んでいました。そのことがこのみことばの中に明らかに記されています。

パウロはこのように言います。「私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。」と、パウロは自分自身について1テモテ1：13からこんな証をしています。ユダヤ教の教師であり、宗教的には熱心で、多くのユダヤ教徒の中で敬われていたパウロがこのように言うのです。驚くべき彼の証です。神の前に喜ばれると思って一生懸命やっていたにも関わらず、「私は…神をけがす者、」だったと言うのです。お気付きになりますか？パウロは自分の罪深さに気付いたのです。自分から神を見ていたパウロは初めて神の目で自分を見たのです。私はこれ程多くのことを神のためにしている、だから、神はお喜びになるだろうと、そのように自分の観点から神を見ていた彼が、神は私をどのようにご覧になっているのだろうと、神のみこころと自分の歩みを照らし合わせて、果して、自分は神が喜ばれるような者なのかどうかと自分の罪深さに気付くのです。だから、パウロは「私は神をけがす者であった」と、そのように自分の罪を告白するのです。

彼は続けてこう言います。「それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。：14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。：15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」と、自分の罪深さに気付いたパウロ、救われる価値のない者であることに気付いたパウロ、しかし、そのような者を神は一方的に愛して救ってくださったと言います。だから、パウロは続いてこのようなことばをもってこの手紙を終えるのです。「：16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。：17 どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。」と、また頌栄で終わります。神を誉め称え、神のすばらしさを心から賛美して終わるのです。パウロは自分の罪深さを知り、そして、神の愛を知った時にその神を心から称え続けていきたいと、そのように願い、そのように生きていたのです。

救われたことを日々感謝しながら生きていたパウロ、それゆえに、彼はこんなことを告白しています。「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」。ガラテヤ人への手紙6章14節のみことばです。「私の誇りとするものはイエス・キリストの十字架だけです。創造主なる神が私を愛して私を救うために十字架で死んでくださった。それ以外に私の誇りとするものはない。いったい、それ以外の何を誇りとするのか？」と。私たちが受けてきた教育であっても、家系であっても、名誉や財産であったとしても、それらすべてのものは私たちを救いへと導くことは出来ません。この罪深い私を救いへと導いてくださったのは神の恵みしかない。十字架こそが私の誇りであり、私は十字架を誇り続けていると、日々、神の恵みを感謝し喜んで神を称えながら生きていたパウロ。私たちもそのように生きたいと思いませんか？そのように歩んでいるなら益々そのように歩むことです。

また、パウロだけではありません。ダビデもこのように言っています。詩篇34：1「私はあらゆる時に主をほめたたえる。私の口には、いつも、主への賛美がある。」、何と、ダビデは私たちが模範としたい歩みをしていましたことでしょう！「私の口には、いつも、主への賛美がある。」と、「いつも、」あるのです。賛美をしたい時だけでなくそうでない時もいつもどんな時でも主に対する賛美があったと、まさに、私たち信仰者が目指したい歩みを彼らは送っていたのです。そのことはみことばによって明らかです。

☆ パウロが神を称える二つの理由

パウロはこの頌栄で「主なる神は栄光を受けるにふさわしいお方である」と称えますが、彼は特に、二つのことを称えています。一つは「主の御力」です。二つ目に「神の知恵」をパウロは称えるのです。私たちはこの二つのことをこれからみことばを通してごいっしょに見ていきます。

A. 神の御力 25, 26節

25・26節「私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方」。「…隠されていたが、」までが25節です。日本語ではこのように訳されているのですが、ギリシャ語でこの25節のみことばを見ると、「あなたがたを堅く立たせることができる方」が最初に記されています。このことばをもって、25節のみことばは始まるのです。つまり、パウロは最初に主なる神の御力を強調しようとするのです。ですから、「立たせることができる方」と書いています、この方にはその力があると言うのです。神はどんなことでもご自分のみこころならそれを成し得る力があるということをパウロは強調するのです。ですから、この25節のみことばは私たち信仰者に「強くありなさい」という勧めではなく、「神の全能さ」を強調しているのです。神とはこのように力に溢れたお方である、この方はどんなことでもお出来になる神なのだということを明らかにするのです。

1. 主の約束

そのことを明らかにした後で、では、神は何ができるというのか？何をなさろうとするのか、何をしておられるのか、「主の約束」についてパウロは教えていきます。先ほど読んだところですが、「あなたがたを堅く立たせることができる方」とあります。神にはそれが可能であるとパウロは言うのです。「あなたがたを堅く立たせる」とは何のことでしょう？このことばは確かに「強める、強固にする」という意味があります。新約聖書の中に13回出て来るギリシャ語です。その中で特に、ルカ9：51のみことばはこのように記されています。「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ、」、イエス・キリストがエルサレムに向かおうとしている様子ですが、「御顔をまっすぐ向けられ、」ということばが今見ている「堅く立たせる」と同じことばなのです。御顔をまっすぐに向けられたイエス、彼が考えておられたことはエルサレムに行くことでした。その揺るがない強い決心のことです。「わたしはエルサレムに行く」というその強い決心、それがここに表わされている訳です。ですから、「堅く立たせる」ということは、主なる神はクリスチャンたちの心を強め、一人ひとりが強い確信を持つように働かれるということなのです。信仰者であるあなたの心を強め、その信仰を強め、あなたが確信を持って生きていくことが出来るように、そのような働きを為さるお方が神だとパウロは言うのです。あなたが確信を持って生きていくことが出来るようにと。

確かに、私たちはイエス・キリストを信じる前は何が真理なのかよく分かっていませんでした。思い出しませんか？パウロとピラトが話をしている様子がヨハネの福音書18章にあります。ピラトはこのように言いました。18：38「真理とは何ですか。」と。確かに、私たちはいろいろな人から、親や友人、また、メディアを通して様々な方面から情報を耳にします。「これが真理だ」と。しかし、私たちはそのことに対して確信を持っていません。例えば、私たちはなぜこの世に生きているのか？いろいろなことを聞いて何となくそれぞれ思いはあるかもしれませんが、質問された時に私たちは何と答えるのでしょうか？「死んでからどうなるのですか？」と…。ある人はこう言っているし、この人はこんなことを言っている、でも、私たちはいったい真理が何かを知らなかった。しかし、私たちは真理を知るように生まれ変わったのです。私たちは真理を知ることによってその真理に対する確信を持つ者になったのです。例えば、私たちが何のために生まれ、何のために生きているのか、その目的を知りました。だから、私たちは神のために、そのみこころに従って生きて行こうとして歩んでいるのです。

私たちは神の永遠の計画も知りました。特に、今、我々の周りを見た時に、これから私たちの国がどうなっていくのかという不安がいっぱいあります。マスコミは言います。戦争になるかもしれない、どうなっていくのか分からないと。でも、私たち信仰者はどうなっていくのか分かっています。すべてのことは神の御手のうちにあり、神がみこころに沿ってすべてのことを導いておられるからです。この世は滅びるということを私たちは知っているのです。ですから、いろんなことが回りに起こっても、私たちはそれらに心を騒がせることがないのです。すべて主の御手のうちにあり、主の約束通りにすべてのことが進んで行くからです。確かに、この世は滅びても私たちはこの主権者なる神の御手のうちに守られています。我々は死んでから先のことも知りました。ですから、私たちは死に対しても喜びをもってその日を迎えようとしします。なぜなら、「私は死んでも生きる」という確信を持っているからです。

そうでしょう、信仰者の皆さん！そして、私たちは真の神を信じたこと、この神によって救われたという確信を持って生きています。神はあなたを「堅く立たせることができる」と。神はあなたに確信をもたらすのです。そのことを私たちは日々経験していませんか？信仰生活において、私たちは今言ったように、何のために生きているのか、神は私を救ってくださったという確信が自分たちのうちに増していませんか？時には、神が近くにいて感じる時があり、時には、神が遠くにいて感じることもあるかもしれませんが、私たちはいろいろなことを通して神が言われたように、神はいつも私たちとともにいてくださる、目に見ることは出来なくとも、確かに、神がいっしょにいてくださるという確信を持って生きていませんか？みことばが私たちに言うことはこういうことです。神はあなたに確信を与えることが出来るということです。ですから、私たちが救いに関しても確信を持っているのは、神がその確信をくれたからです。このみことばを通して、神は私たちに語ってくださり、そして、うちに宿っている聖霊なる神がそれを明らかにしてく下さるのです。

みことばが言うことは、その確信は神が与えてくださるということです。私たちは人々に一生懸命確信を与える必要はないのです。神が与えてくださるからです。私たちが出来ることは、みことばがこう言っているとみことばをもって神のみこころを示すことです。しかし、気をつけなければいけないのは、もしかすると救われていない人に、救われていると偽りの確信をもたらすことです。これは非常に危険で悲惨なことです。みことばが教えているのは、神がお救いになったら、その人のうちに神は確信を与えるということです。皆さんはだれかからいつも「救われている！救われている！」と言われて確信を持つものではありません。あなたが神と歩んでいるうちに、神ご自身が「わたしはあなたの神だ。わたしはあなたを絶対に離さない。わたしはあなたといつもともにいる。わたしはあなたをわたしの天に迎える、そこにわたしはあなたのために住まいを設けた。」と言ってく下さるから、その確信を持って生きる者へと神は私たちを変えていかれるのです。それが最後にパウロが言っていることであり、それゆえに、彼は神に感謝をささげるのです。そのような強い確信を神は私たちにくださるのです。

私たちはこのみことばを通して、神は信頼に値するお方であるという確信を持っています。神が言われたことは必ずそうなるとその確信を持って生きています。どこからその確信が来ているか？みことばの学びです。信仰者との交わりもあるかもしれませんが、しかし、みことばは神ご自身があなたのうちに働いて、そのような確信をあなたのうちに増していくと教えます。そのことを神は為し、これが神に出来る働きだとみことばが教えるのです。

2. 確信を得る方法 : 福音による

では、どのようにしてその確信をもつのか？パウロのことは私たちが見るなら、確信を持つ方法は「福音」だと言います。福音によって私たちはこの確信を持つと。というのは、この25節のみことばを見ると、「私の福音とイエス・キリストの宣教によって、」とあり、この「よって」という前置詞が「福音」ということばの前につけられているのです。ですから、パウロは「福音によって」と言って福音の説明を加えたのです。ですから、この25、26節でパウロが言うことは、福音によって神はあなたを堅く立たせることができる、あなたに確信をもたらすことが出来るということです。

そして、この「福音」に関して三つの説明を加えるのです。

1) 「私の」福音

なぜ、「私の」と言ったのでしょうか？この福音と彼自身が個人的な関係を持っていたからです。

◎**彼が信じた福音**：というのは、パウロ自身がこの福音のメッセージを信じる者だったからです。Ⅰコリント15：2-3でパウロは福音についてこのように教えます。「また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことはしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。」と、パウロは福音について教えます。この福音のメッセージを信じる信仰によって救われると言ったのです。そして、その後、パウロはこのように続けます。3節「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、」とパウロ自身がこの福音のメッセージを信じていると告白するのです。だから、「私の福音」、つまり「私が信じた福音だ」と言うのです。

◎**彼に委ねられた福音**：実は、この福音のメッセージは私に委ねられたものだと言います。Ⅰテサロニケ2：4に「私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。」とあります。パウロはこのように告白しています。Ⅰテモテ1：11にも「祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、こうなのであって、私はその福音をゆだねられたのです。」とあります。パウロは知っていたのです。このすばらしい救いをもたらす神のメッセージ、福音は私が信じただけでなく、神はこのメッセージを私に託してくださった、

私にゆだねてくださった、だから「私の福音」と言っているのです。エペソ 3 : 7 には「私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。」とあります。

◎**彼が宣べ伝えた福音**：もう一つ、彼が「私の福音」と言ったのは、このメッセージこそパウロが宣べ伝えた福音のメッセージだったからです。私が信じただけでない、私に委ねられただけでない、私が実際に宣べ伝えた福音、だから、パウロは「私の福音」と呼ぶのです。I コリント 15 : 1 では「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。」とこのように言っています。パウロはこの福音のメッセージを宣べ伝えたのです。彼が信じ神から委ねられた福音のメッセージを出て行って伝えたのです。

ガラテヤ 1 : 11 - 12 ではパウロは面白いことを言っています。「兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。：12 私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。」と、確かに、福音のメッセージを語ったのですが、このメッセージこそ神が私に与えてくれたものだと言っています。パウロは告白します。その他にもローマ 1 : 5 に「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらしためなのです。」、コロサイ 1 : 25 には「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。」と書かれています。

さて、パウロはまず私たちに確信を持って生きていくために必要なことは「福音」だと言います。この福音を信じることによって信仰生活が始まると言うのです。この福音によって神の救いをいただくことによって私たちに確信を持った生活が始まっていくと言うのです。すべてはここから始まると。

2) 「イエス・キリストの宣教」

福音についての説明は 25 節の続きに書かれています。「イエス・キリストの宣教によって」とあります。この「宣教」ということばは「(布告者)の布告、(神の使者の)告げることば、告知、知らせ、説教」と訳されるギリシャ語です。そのことばがここで使われています。今、日本語で見ると「イエス・キリストの宣教」とあって、これは「イエス・キリストご自身がお語りになったメッセージ」と取れませんか？果して、パウロはそのようなことを言わんとしたのでしょうか？そうではなく、実は、これは「福音のメッセージの内容」のことなのです。この「イエス・キリストの宣教」ということばと、その前の「私の福音」ということばは同義語です。「福音」をより明確にしようとしているのです。ですから、パウロは「私が語った福音、それはイエス・キリストについての教えである。」とそのように言っているのです。実は、この箇所を文法的に見るとそのことがよく分かるのです。

◎その理由：文法的証明

・「イエス・キリスト」が「宣教」という行動の目的である

この「イエス・キリスト」と「宣教」という二つの名詞を見たときに、イエス・キリストが宣教という行動の目的になっていることが分かります。ですから、ここで言われていることは「宣教する」という行動の目的なのです。そして、何を宣教したのかです。だれが宣教したのかではないのです。何を宣教したのか、そのことを言っているのです。ですから、宣教、宣べ伝えた、メッセージを語った、何についてですか？イエス・キリストのことです。それがメッセージの内容であるとパウロは教えるのです。

・「福音」と「宣教」の二つの名詞が「～と、(and)」という接続詞でつながれている

福音があって、そして、宣教と、この二つの名詞の間に接続詞「アンド」がついているのです。これは最初の「私の福音」の意味をより明確にするために補われたのです。ですから、文法的にこのことばを見たときに、パウロが私たちに言わんとすることはかなり明確になって来ます。ですから、「私が語った福音」と「イエスがお語りになったメッセージ」ではなくて、私の語った福音はイエス・キリストがそのメッセージの中心であると言ったのです。トーマス・シュレイナーという神学者は「私の福音によって、すなわち、イエス・キリストについての説教、メッセージである」と、この箇所をそのように訳します。また、神学者ジョン・マレーは「宣教ということばは単に宣教という行為のことを言っていると理解すべきではない。それは宣教されるメッセージのことを言っているのである。」と言います。「イエスが主題である福音」、それがパウロがここで教えようとしていることです。ですから、パウロは「私の語っている福音はイエス・キリストが主題であり、イエス・キリストがその中心である。これが私の語った福音だ。」と言うのです。

ですから、パウロはこのように言います。I コリント 1 : 23 - 24 「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、：24 しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なので

す。」、また、Ⅱコリント4：5－6でも「私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕えるしもべなのです。：6「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。」と言っています。それがパウロだったのです。パウロはイエスについても自分の考えを語るのではなくて、イエス・キリストご自身を語ったのです。イエスがいったいだれなのか、イエスがいったい何をなさったのか、そのことを語ったと言うのです。自分の考え、自分たちのことではなく主の教えを語るのです。

今の私たちもそのことをしっかりと考えなければいけません。なぜなら、福音というメッセージがいろいろと間違っただけで伝えられているからです。私たちがこのパウロのこの証を通して教えられることは、パウロはキリストを語りました。正しく語りました。私たちもキリストを、この福音というメッセージを正しく語らなければいけません。福音のメッセージをみことばで見ると、みことばは私たちに「あなたが天国に行きたかったらイエスさまを信じなさい。」とは教えていません。却って、あなたがもしこの救いに与りたいと望むなら、「あなたはすべてを捨ててわたしについて来なさい」と言われます。「狭い門から入りなさい」と言われたのです。福音を信じることは皆さんもよくご存じのように大変な覚悟が要ります。なぜなら、福音を信じた後、様々な摩擦を経験するからです。イエスを信じた者たちはこの地上にあっていろいろな困難を経験します。信仰の勇者たちがみなそうであったように…。確かに、こんなに難しい信じがたい福音を語るなら信じる人がいなくなってしまうかもしれませんが、それは私たちの責任ではありません。私たちの責任は神の福音のメッセージを正しく語ることです。そうでなければ、偽りの福音を信じて救われていると思っている未信者が永遠の滅びに至った時に、どのようにして私たちはその誤った行為を詫言びるのでしょうか？私たちの責任は神のみことばを語ることです。パウロがしたように「私はキリストを宣べ伝える。十字架につけられたキリストを宣べ伝える。」ことです。

パウロは神の福音のメッセージを忠実に語り続けました。パウロはコロサイ1：25でこのように言います。「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神の**ことばを余すところなく伝えるためです。**」、これは地理的なことではなくて、内容のことです。パウロは「私は神のみことばを、神の真理を妥協することなく語り続ける。」と告白するのです。なぜ、パウロは神のおことばを人の顔色をうかがいながら妥協するようなことをせず、だれであっても神のおことばを忠実に正確に語り続けたのでしょうか？その理由は何でしょう？簡単です、皆さん！人はみことばによって救いに与り、救われた人はみことばによって成長して行くからです。確かに、神は私たちを強く立たせることができます。でも、そのためには私たちがしっかりと神のおことばに立っていなければなりません。だから、私たちは神のおことばを正確に語り続けるという責任をいただいているのです。パウロはそのことを行なったと言うのです。「**神のことばを余すところなく伝えた**」と。真理を正確に妥協しないで伝え続けて来たと。私たちがこの真理によって主を知れば知るほど私たちの信仰は成長していきます。

パウロはⅡテモテ1：12でこのように言います。「**そのために、私はこのような苦しみにも会っています。**」と、パウロは信仰ゆえに様々な迫害にあったことを話しています。パウロは迫害だけでない、例え、殉教であったとしても私は恐れないと、そのような告白をするのですが、その後にもこのように続けます。「しかし、**私はそれを恥とは思っていません。**というのは、」なぜ、パウロはキリスト者として神に忠実に従って行くことを恥としなかったのか？その理由です。「私は、自分の信じて来た方をよく知っており、」と、私はだれを信じたのか、このお方はどのようなお方なのかよく知っている。だから、彼は確信を持って生きたのです。彼の信仰は揺るがなかったのです。そして、こう続きます。「**また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださいることができる**と確信しているからです。」と。

この「確信」ということばが面白いのは、ギリシャ語の完了形という時制を使うのですが、これは過去にあったことの結果が今も継続しているということです。パウロはイエスを信じた時にこの確信を得たのです。その確信とは、この地上においても、そして、永遠に神が私を守り続けてくださるという確信です。このローマ書で私たちが見て来たように、私の神は私がこの信仰から逸脱して背教に至ることなど決してないように守ってください、だから、クリスチャンは神によって救われたゆえに救いを失わないし、救いから離れることは絶対にないのです。この地上にあって神は私たちを守り続けてくださるというその確信です。「**私のお任せしたものを**」、私のすべてはこの方にお任せしたから、この地上にあって、そして、永遠にこの方が守ってくれる。それがパウロの確信だったのです。

しかも「**かの日**」とあるのはいつのことでしょう？私たちが主イエス・キリストの前に立ち、私たち

の信仰において神からご褒美をいただくその日のことです。その時まで神があなたや私を守ってくれるのです。その確信を得たパウロはその確信をずっと持ちながら信仰生活を歩んでいたのです。神を知ることによって、私の神がどんなお方か、それを知ることによって、私たちの確信は増していくのです。だから、みことばを学ぶのです。だから、神の真理を学び続けていくのです。それによってのみ、信仰が成長するからです。

だから、「堅く立たせる」ということを私たちは見て来ているのですが、信仰の成長と関連していることは皆さんお分かりになったと思います。パウロが言うように、私たちの神はあなたの信仰をきちんと守るだけでなく成長させてくれる。あなたが確信を持って生きる者へと成長させてくださるのです。ですから、このように言うことができます。「主への揺るがぬ確信を持って生きている人は信仰において成長した霊的な人です。」と。言い方を変えるなら「信仰において成長している人は、どんな時にも主への揺るがぬ確信を持って生きる人です。」と。

どうでしょう、皆さんの信仰は？神のみことばによって、主を知ることによって、より強固なものにされているでしょうか？神を知ることによってのみ私たちの信仰は成長していきます。神を知ることにおいて私たちはより貪欲でありたいものです。私たちの神のことをもっと知りたい！と。

3) 奥義の啓示によって

さて、パウロはこの16章で、福音によって神はあなたを「堅く立たせることができる」、確信を持った信仰者としてあなたが成長していくこと、それを神が為してくださること、そのすべてはこの福音に掛かっているということを言いました。そして、パウロはその福音は自分が信じている福音であり、自分に託されたものであり、自分が語っているものだと言います。そして同時に、この福音はイエス・キリストを中心にしたものだ、イエス・キリストについてのメッセージだと言いました。

そして、三つ目にパウロが言うのは「奥義の啓示」です。26節に「今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、」とあります。「奥義の啓示」ということばも実は福音を説明するのです。

(1) その意味：「奥義の啓示」

「奥義の啓示」とはどのような意味でしょう？「奥義」というギリシャ語は英語で「ミステリー」と訳されることばです。確かに、多くの異端は教会の中にいろんな神秘的な、つまり、ミステリーな教えを持ち込みましたが、パウロはそのことを言っているわけではありません。

「奥義」と言ったとき、それは旧約の時代には人々に知らされていなかったことです。旧約の時代には人々に隠されていたこと、それが「奥義」なのです。そして、「啓示」と言っています。啓示というのは、神がある真理を人間に明らかにされることです。もし、神がそういうことをお決めにならなければ、真理を示そうと働きをなさなければ私たちは決してそのことを知ることがなかった、それが啓示なのです。ですから、「奥義の啓示」というのは旧約の時代には人々に知らされていなかったことが、新約の時代になって明らかにされた、その神のすばらしい恵みのことです。また、このようにも言えます。「昔は隠されていたが今は啓示により人類に明らかにされる救いの奥義である」と。つまり、旧約の人たちにはよく分かっていなかったけれど、新約の時代になってこの神の救いのことがより明確に示されたということです。

(2) パウロの説明：四つのこと 26節

「奥義の啓示」と言ったパウロですが、実は、パウロ自身がそのことを説明してくれます。奥義の啓示に関して私たちは四つのことを見ることができますが、もう一度25、26節を見ましょう。この箇所の直訳を読みますから、皆さんは聖書の箇所を目で追ってください。「25節、今あなたがたを堅く立たせることができる方、私の福音とイエス・キリストの宣教によって、奥義の啓示によって、それは世々にわたって長い間隠されていたが、26節、しかし、今や現わされた。そして、預言者たちの書を通して、永遠の神の命令に従って、あらゆる国の人々に知らされた信仰の従順へと導くために。」。確かに、新改訳聖書で訳された日本語が美しいのですが、25節26節にはこのようなことが記されているのです。

先ほども話したようにここには四つのことがあります。パウロは自分のことばをもってこの「奥義の啓示」がどういうものなのかを私たちに教えてくれています。

a) 「それは世々にわたって長い間隠されていた」

しかし「今や現わされた」と26節の前半です。かつては長い間隠されていたことが、今は明らかにされたと、奥義の啓示のことです。

b) 「預言者たちの書を通して」

確かに、あるところまでは教えられています、それもぼやけていて良く見えなかったのです。この「預言者たちの書」というのは旧約聖書のことです。旧約聖書の人々が全く知らなかったということではなく、彼らはよく分かっていたし、今見たように、長い間隠されていたのではっきり見えなかったのです。しかし、新約の時代になってそれがはっきりと見えるようになったのです。

c) 「永遠の神の命令に従い、あらゆる国の人々に知らされた」

これは非常に難しいのですが、この「命令」ということばを見るとパウロのメッセージの意味が分かります。「命令」とは「権利、権限」を意味することばです。ということは、神があらゆる国の人々に、この奥義を明らかにされたと言うのです。それは神の権限によって、神の権利によって為されたと言っているのです。つまり、神が奥義を明らかにされたのは、永遠に存在しておられる神のご計画に基づいて為されたことであって、偶然に起こったことではないと言うのです。人間がだんだん賢くなって、そして、理解したということではないと言っているのです。先ほども見たように、啓示というのは神が知らせようとしなければ絶対に知ることのできない真理なのです。神は私たち新約の時代に生きる者にこの真理を教えてくださいました。でも、それは偶然にそうなったのではない、神のご計画に基づいているということがパウロが教えていることなのです。ですから、神の持つておられる権利に基づいて、彼の権限に基づいてこの真理を人々に明らかにしようとなされたということです。すべては神の摂理に基づいて為された行為であると言えます。いつ、この預言が成就するのでしょうか？このようなことはすべて神の御手にある出来事であると言えます。神ご自身がそのように定められてその真理を明らかにしてくださいました。みことばを見ます。

テトス 1：2－3 「それは、偽ることのない神が、永遠の昔から約束してくださいました永遠のいのちの望みに基づくことです。：3 神は、ご自分の定められた時に、このみことばを宣教によって明らかにされました。私は、この宣教を私たちの救い主なる神の命令によって、ゆだねられたのです。——このパウロから、」

Ⅰテモテ 1：1 「私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエスとの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから、」

d) 「信仰の従順に導くために」

奥義の啓示に関してパウロが四つ目にいうことは「信仰の従順に導くために」です。なぜ、このようなことを神が為さったのか？この奥義を、福音という素晴らしいものを明らかにしたその目的がここに書かれています。それは「人々が信仰の従順に導かれるため」、つまり、彼らが救われるためです。救いこそ神の究極的目的だからです。

ですから、私たちが今見てきた学びによって、このような結論を引き出すことができます。

(3) 結論

「奥義の啓示」は確かに福音に関することです。だから、パウロは神はあなたがたを強く立たせることができる、確信を持って生きる信仰者へと私たちを変えていってください、福音によってそれが可能だと言いました。福音というのは、パウロ自身の福音であり、そして、イエス・キリストの宣教、イエス・キリストがメッセージの中心であり、そして、神が旧約の時代には明確にされなかったものを新約の時代に明らかにされた、その救いのメッセージだということです。

今、私たちはこの25節26節を見て来たのですが、最後に、ローマ人への手紙1章に戻ってください。1章2節からパウロからの挨拶が記されていますが、16章を開けたままでその箇所を見てください。「：2 ——この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、：3 御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、：4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。：5 このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです。」、「預言者たちを通して」、「あらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすため」は16章にも記されていたことです。この福音は「預言者たちを通して」約束されたものであり、そして、福音の務めをキリストからいただいたのは、「あらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすため」だと言っています。

パウロはこのローマ書1章をこのことばで始め、そして、最後にそのようなことを成して下さった神を称えるのです。預言者によって約束され、そして、神が明らかにされた福音によって人々が救われる、私もこの福音によって救われた、だから、私はこの偉大な神のその御力を心から称えたいと言うのです。私をその罪から救い出してくださいただけでない、私を強く立つ者として、確信を持って生きる者として私を成長させて下さった、その神の御力を私は心から誉め称えたいと言うのです。この16章、

の最後でパウロはこのような神を称えました。そして、神の為さったその偉大なみわざがこの16章の中に記されているのです。罪人を信仰によって救い、生まれ変わらせ、そして、その一人ひとりを用いてくださると。パウロはこのようなして最後に神への感謝を表わしています。

残念ながら、16章の最後まで見ることはできませんでしたが、次回、私たちは神のすばらしさ、パウロが称えた神の知恵について見ていきます。最後に、皆さん、私たちが今一度自分自身に問いかけたいこと、それはこういうことです。パウロは救われたことを感謝していました。救ってくださった神に彼は感謝をささげていました。その方を心から誉め称えながら、その方のことを喜びながら歩んでいました。問題は私たちです。あなた自身、救われたことを神の前に喜びながら歩んでおられますか？もう一つ言うなら、パウロは確信を持って生きていました、あなたも主への確信を持って歩んでいらっしゃるかどうか？また、主への確信は信仰生活において増しておられるかどうかです。「私は主が言われたことを信じる。ゆえに、私は正確に主が言われたことを知りたい。」と、そのように願って、そのように歩んでおられますか？パウロは賛美しなければいけないから賛美したのではありません。神を称えなければいけないから称えたのではありません。神の自分に対して為されたみわざを見た時に、心の内側からこの方に対する感謝が溢れて来たのです。我々も覚えることです。神の為してくださったすばらしい救いのみわざを！そして、神があなたのために為してくださっているすばらしい恵みのみわざを覚える時に、願わくは、あなたも私もパウロと同じように、「神さま、私はあなたを感謝します。あなたを誉め称えます。」と、そのように神を称えながら生きる信仰者へと変えられていくことです。

どうぞ、そのような信仰者へと変えてくださる神に頼りながら、その方を覚えてこの一週間歩んでください。神を称える者として、神を誉め称える者として！！

《考えましょう》

1. 「イエス・キリストの宣教」とは何のことを説明してください。
2. 私たちの考えではなく、イエス・キリストだけを宣べ伝えることがどうして大切なのでしょうか？
3. 神は「あなたがたを堅く立たせることができる」とパウロは言いました。では、そのためには、私たちは何もしなくても良いのでしょうか？何をすべきなのかをお書きください。
4. 私たちの確信が増すことが、どうして私たちの信仰生活において大切なのでしょうか？